大学選手権決勝～力は出し切ったものの帝京大学に及ばず

1 月 2 日の準決勝で京産大に 52 対 30 で快勝した明治は準決勝で天理大を 22 対 12 で下した帝京大学と 1 月 13 日に国立競技場で対戦しました。

戦前の予想はやはり前年度チャンピオンの帝京大学有利。ただ、明治も準決勝で廣瀬キャプテンが復帰し、対抗戦終了後、大学選手権に入って確実にチーム力がアップしており、好勝負が期待されました。

明治のキックオフがダイレクトタッチとなり、帝京大学のセンタースクラムから攻め込まれ、先制トライを許してしまいました。その後膠着した時間帯が続き、落雷による約 1 時間の中断を経て再開後、明治のペナルティから明治陣のゴール前のラインアウトからモールを押し込まれ、帝京大の江良キャプテンにトライを追加されてしまいました。
こうなってくると、雰囲気的には一気に帝京ペースになりかねませんが、ここで崩れないのが廣瀬キャプテンが復帰した明治が集中力を見せ、前半 35 分、39 分と連続トライをあげて 12 対 14 で前半を終了しました。

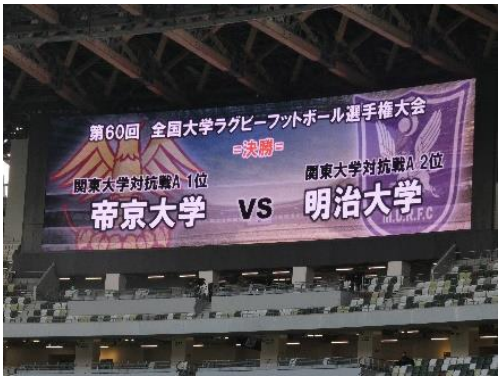
前半を見て感じたのは、ワイドに展開すれば、チャンスが広がるということでした。
しかし、後半は雪交じりの天候でハンドリングエラーが増え、思うような展開ができず、反則でペナルティキックで帝京に得点を追加され、ディフェンスの時間帯が増えてしまいました。
明治もペナルティキックで 15 対 27 まで追い上げましたが、再び帝京にラインアウトからのモールを押し込まれてのトライで 15 対 34 となり、そのままノーサイドを迎えました。

3 月の国立地域支部の講演会で神鳥監督が「帝京に勝てるのは明治をおいてほかにない」とおっしゃられて、チームとしては「ハイブリッド重戦車」を目指し、チームスローガンは「ONE MEIJI」としてスタートして、大学選手権では「ハイブリッド重戦車」の完成形を見ることができました。

残念ながら創部100周年を優勝で飾ることはできませんでしたが、年越しも果たし、我々ファンを決勝戦まで連れてきてくれたラグビー部の皆さんには、本当に感謝しかありません。

試合終了後に廣瀬コールがどこからともなく起こりました。今シーズンは、選手、スタッフ、ファンが一体となった素晴らしいシーズンであったと思います。

101年目のシーズンは、「ハイブリッド重戦車」をさらに進化させて、良いチームを作ってくれることを信じてやみません。



国立地域支部　越智　浩治
（1984 年商学部卒）

WATER

讀賣新聞

SMBC

nippn

toto

SMBC

nippn
nippn